



ま  
ち  
の

# 達人

TATSUJIN

この指とまれの会  
主宰 本多 公子

今回は、創作ミュージカルから中国体操・太極拳まで幅広く活動し『静と動』のバランスを楽しんでいる本多公子さんをご紹介します。

本多さんは、創作ミュージカル『この指とまれの会』を主宰されて18年。毎年、企画から台本執筆、演出までこなしており、毎回よく新しいアイデアが浮かぶものだと感心します。

どのようにして台本を書くのかお聞きすると、その年どしで違っていると返ってきました。題名が最初に浮かぶ年、テーマに沿った詩が最初にできる年、セットのデザインが夢に出てきて、ストーリーを思いついた年もあるそうです。

『太古 猫は忙しかった』で

は、夢の中に砂漠が浮かび、蒲郡特産のロープで砂漠や森を表現することを思い付かれ、500人の観客にも参加してもらうことに。そして、『ゲノムとちゃぶ台はじめの一步』は、新聞で読んだ遺伝子組み換えについての講演会に出かけたことがきっかけ。間伐材で作ったちゃぶ台も登場しました。また、大黒柱を見ていて思いついたタイトルが『地球の大黒柱』。舞台上に三河木綿の手織場を再現しました。さらにアフガニスタンで活動している中村哲医師のことをイメージした『青の人、青の翼』を公演し、活動に協力するペシヤワール会の会員になって、もう5年になるそうです。

本多さんの達人たるゆえんは、3カ月という短い期間で、18年間、新作の創作ミュージカルを創り続けていること。そして、そのテーマが、地元や社会とつながっていて、未来とつながっていることでしょうか。

壮絶とも言える3カ月の夏の公演が終わると、対極にあるような静かな呼吸の太極拳を、何事も無かったかのように悠然と舞い、『静と動』のバランスを楽しんでおられます。



## 水族館



学芸員 小林龍二

竹島水族館 ☎68・2059

寒くなってくると鍋がおいしいですね。カニ・アンコウ・フグ・ブリなど、鍋では水族たちが大活躍します。展示替えや掃除などで魚を移動する時うまくすくえないと「コノヤロ、おとなしくしろ、鍋にしちまうぞ」と思ってしまうこともあります。

さて、水族館の水槽というのは鍋みたいなもので、鍋＝水槽、具材＝生き物、食べる人＝お客さん、お母さん＝飼育員、という具合にそれぞれ対応します。鍋を作るお母さんの立場である飼育員は、食べてくれる人（お客さん）がおいしく食べられるように水槽内の具材（生き物）を吟味しなくてははいけません。すき

### 水族館は鍋

焼きの中にキムチが入っていたらまずいように、水槽の中には泳ぐべき魚がきれいに泳いでなければならぬのです。そして、鍋にもすき焼き、キムチ、しゃぶしゃぶなどの種類があるように、水族館にもいろいろな水槽があるというわけです。水族館は鍋のパイキングですね。皆さんは水族館で自分が食べたい鍋（水槽）だけを眺めるのもいいですし、いろんな鍋を箸で少しずつ突つつかうように見て歩くのもいいです。

水族館を出た時、本物の鍋を食べた時と同じように、皆さんの心も体も温かくなっていけば水族館人は、いい鍋が提供できたことになりました。それには鍋だけではなく、食べる環境や一緒に食べる人、店員の対応なども関係してくるでしょう。水族館で「おいしい鍋」を味わった時は、今度は皆さんが「鍋奉行」となって、周りの人に宣伝してください。

